



HIV感染のリスクをいま一度

HIV感染症がARTという薬物治療の登場でコントロール可能な疾患となり、非感染者と同等の予後になったとされているが、海外渡航における注意点は非感染者と比べて少なくはない。また感染しない注意も必要だ。今回は、国立国際医療研究センター病院国際感染症センターの山元佳先生に、安全に渡航するために知っておきたい渡航リスクについて話を伺った。

●改めてエイズHIVとはどんな病気か

HIVとはヒト免疫不全ウイルスの略称であり、免疫から身を守るシステムを不全にするウイルスのことです。免疫の司令塔であるCD4陽性T細胞（以下、CD4）を破壊することで免疫を破綻します。CD4の数が減るため、通常感染することが少ない病原体に感染するようになり、重症化しやすくなります。それらの感染症を含むAIDS指標疾患を発症するとAIDS（後天性免疫不全症候群）と呼ばれます。感染経路は粘膜曝露で主に性交渉、次いで母子間です。

●日本、世界の感染者数の推移

世界のHIV感染者数は3700万人、2014年の新規感染者は200万人、死亡数は120万人と推測されています。日本では2013年には15000人の新規感染者が報告され、累積感染者数は2.3万人を超えました。世界的には男女比は1対1ですが、日

本は圧倒的に男性が多く、特に男性同性間の性交渉と推測されるものが全体の60%を超えています。

●治療薬と海外旅行

治療は3種類の薬剤を組み合わせるART(Anti-retrovirus therapy)を行います。この治療により、HIV感染者も非感染者とほぼ同等の予後が得られるようになりました。抗HIV薬は様々な副作用を来し、時に日和見感染の一時的な増悪を来すこともあるため、薬の導入から3か月以内の海外渡航は避けるべきとされています。ただし遠くまで時差の大きい国でも、1日の内服忘れや抜けが治療失敗につながることは稀なので、過度に心配しないことも大切です。

●海外旅行で感染しないために

過去の報告から、海外渡航中は性活動が活発になるためHIV感染が比較的多く、感染者の40%弱が海外旅行中と推測された報告もあります。防止には①感染状況が不明な相手との性交渉を避ける。②性交渉の際には最初からコンドームを付けることが大事です。ほかの性感染症のリスク減少にもつながります。

●感染者の海外旅行

国によってはHIV感染者の入国を制限しています。科学的根拠はなく、WHOも一貫して否定的立場をとっていますが、70か国が規制を設けています。http://www.janplus.jp/project/international_networkなど

のWebページで確認できます。

治療を開始している場合は管理が大切です。途上国では薬剤が簡単に手に入らないことが多く、盗難や紛失にも注意し、予備の内服薬の準備や保管方法を考えておきましょう。

感染症は重症化リスクが高いので要注意で、経路として多いのは一般的な海外旅行の場合と同じく食べ物です。サルモネラ、腸チフス、バラチフス、クリプトスポリジウム、イソスポーラ、A型肝炎などに要注意。リスクを減らすには腸チフスやA型肝炎は事前のワクチン接種、現地では生水や水の摂取を避け、火を通したのや目の前で皮をむいたものを食べるようにすることです。

またHIV感染者で重症化リスクの高い肺炎球菌感染症、髄膜炎菌感染症、麻疹や性感染症の一つであるB型肝炎はワクチン接種の予防が可能です。マラリアも重症化するため、予防内服の相談や防蚊対策、疾患に関する情報を得ておきます。

黄熱ワクチンは、麻疹ワクチンなどと同様の弱毒化した病原体を用いたワクチンなので、易感染状態では多臓器不全を来す重症副反応のリスクが上昇します。このため接種に際してCD4は200/μL以上が必要であり、それ以下だと接種禁忌です。その場合は渡航を中止するか、医療機関発行の接種禁忌証明書で対応しますが、証明書で入国が保証されるわけではなく、黄熱感染のリスクも負うことを理解しておきましょう。

挑戦の数だけ、 保険がある。

To Be a Good Company



東京海上日動

